

示-81

75歳以上の長高齢者の肺癌，特にその外科的療法を中心として

いわき市立総合磐城共立病院胸部外科
○宇野 顕，萩原 昇，池田道昭，谷田達男，
菅間敬治，山根喜男，大貫恭正，相良勇三
呼吸器内科 林 泉，栗田健吉，阿部達也

目的：今年5月までに913例中394例(43.2%)の切除術を施行した。煙草，公害と共に日本人の寿命の延長と共に，昭和51年以降70歳台の症例が昭和52年を除いては60歳台より多くなったので，果して75歳以上の症例はどうであったかを目的として検討した。

対象：全症例中70歳以上292例で，74歳まで165(18.1%)，75歳以上91歳まで129例(14.1%)で病巣は右側75例，左側47例，両側7例で，組織は扁平上皮癌，腺癌とも43例，大細胞癌，小細胞癌とも11例，未分化癌とのみされたもの4例，細胞診陽性10例，組織がさだかでないもの7例で，I期8例，II期12例，III期26例，IV期83例であった。

外科的療法を主体とした治療成績：外科的療法は38例(23.0%)に試みようとした。I期8例中，原病死1，拒否3，切除4で，79歳男子を血清肝炎で3カ月後に失った。残りの3例は術後7年3カ月の例をはじめ，みな生存中である。II期12例は低肺機能1，拒否3で，拒否群は最長1年6カ月生存したにすぎないが，切除群は1例は1年3カ月で再発死，1例は重複癌で胃癌で1年3カ月後に，1例は高血圧で1年10カ月，1例は1年5カ月後に自殺したが，1例は71歳で右上葉治癒切除後再発し79歳で左下葉治癒切除術後，3年後老衰で死亡，残りの3例は生存中である。III期26例中手術不能12，拒否4，麻酔で中止1，開胸のみ1のうち日の浅い1例を除く17例中14例は6カ月以内に，1例のみがやっと1年生存した。切除8例中，肺炎で1例を1月以内に，再発で1例を1年以内に，もう1例を4年1カ月で失ったが，老衰で4年2カ月で1例が死亡し，あとの4例は生存中である。IV期83例中日の浅い3例を除き80例中，手術不能65，拒否2，開胸のみにとどまった3例計70例中1例のみが3年1カ月後の現在生存中で1年4カ月で転移で，1年1カ月で原病で，あとの67例は1年以内に死亡している。また切除術10例中，充分転移巢の切除も行ったが，3年8カ月生存中の症例はあるが，1年以上生存中は3例のみで，ほかは合併症や再発で死亡した。

結論：肺癌激増の理由の1つに日本人が長命になったので，さらに益々高齢層に発生するものと考えられるので，すでに74歳まではあまり問題ではなく，これからは75歳以上の症例をいかに治療手術を行うかが問題であると思われる。当科症例中80歳以上が5例含まれており，80歳の男子の気管形成術も行って良い結果を得たが，高齢層手術の安全性に努力したい。

示-82

高齢者肺癌切除例の検討

長崎大学第1外科

○綾部公懿，謝 家明，太田勇司，君野孝二，
田川 泰，山下三千年，横山忠弘，
石橋経久，母里正敏，川原克信，富田正雄

人口の高令化とともに70才以上の肺癌症例も増加している。教室で経験した高齢者肺癌切除例の治療成績から，手術の適応，術式，及び外科治療上の問題点について検討した。

検索対象は昭和30年より昭和58年6月までに当科で切除のおこなわれた肺癌375例中，70才以上の高令者肺癌51例(13.3%)である。51例のうち最高年令は84才で，その平均は73.3±3.4才であった。高齢者肺癌切除例の組織型別頻度をみると腺癌22例，扁平上皮癌19例，大細胞癌5例，小細胞癌2例，未分化癌1例，その他2例であり，TNM分類による肺癌の進行度は，I期21例，II期5例，III期23例，IV期2例で，70才以下肺癌群と比較して，その分布に著しい差異はみられなかった。術前の呼吸機能検査上，65%の症例に閉塞性障害がみられ，また心電図上においてもSTの低下，不整脈，心肥大などの異常所見を有していたものが66.4%にあり，呼吸，循環機能に障害を伴っている症例が多かった。その他の術前合併症としては高血圧症，糖尿病，腎機能障害，気管支喘息などがみられた。

手術術式は肺葉切除術が39例(うち気管支形成術併用5例)と最も多くおこなわれており，その他二葉切除5例，肺全摘3例，区域切除3例，楔状切除1例であり，胸壁合併切除も2例に併用された。また縦隔リンパ節の郭清も大半の症例に施行された。

術後合併症は21例(41.2%)にみられたが，そのなかでも喀痰咯出障害による無気肺が多く，気管支鏡による吸引を必要とした。不整脈の発現も多かつたが，重篤なものは少なく，殆んどが一過性であった。その他7日以上air leakage，肺炎，心不全，消化管出血などがみられた。手術死亡は5例(9.8%)で，その死因は心肺不全，膿胸，気管支瘻，出血であった。この他5例が肺炎，心不全で入院中に死亡した。死亡例の半数は二葉切除，全摘例であったが，術前機能検査上の障害の程度とは関連はなかつた。しかし，術前，後管理の改善により，この4年間に切除された25例では手術死亡はわずか1例と減少している。

高齢者肺癌切除例の予後に関しては，5年以上経過例17例からみた5生率は13.3%で，必ずしも良好とは云えないが，約半数は2年以上生存している。一般に進行度ではStage Iが，術式では肺葉切除の予後が良好であったが，Stage IIIや肺全摘例，胸壁合併切除例でも4年以上の生存例をみていることから，症例を選択すれば高齢者と云えども手術適応の拡大が可能と考える。